

財団法人小倉コレクション保存会設立趣意書

庶

余は所謂実業家であつて、考古学や史学には無縁であるのに、珍貴な朝鮮ものが手許にあるのは、早い時期に朝鮮に渡り、終戦まで四十二年間、朝鮮で手広く仕事をしてきたからに他ならない。最初は学問的なことは分らないが、出土品などを見て、日本と朝鮮との文化的民族的関係は、意外に古く且つ深いらしいという感じを抱き、その裏附けになりそうなるものを、言わば気紛れに集めたのが発端である。

日本民族は、本来の土着民に加えるに、出雲を本拠とした北方種族と、日向を基地とした南方種族との混成民族であることは、最早間違いない事実とされる。この中、出雲地方へ渡来した一派は、朝鮮人と同一種族であるか否かは疑問であるが、少くも朝鮮人を随伴して来たことは疑を容れない。先年、出雲大社附近で発掘されたクリスタル型銅剣は、余の所蔵する朝鮮慶州出土のものと、全く同型同質で前漢以前の製作と鑑定されるが、これは朝鮮を経て日本に渡来したものと考えられるのである。

また勾玉は、以前は大和民族独特の装飾品で、他民族に類がないと言われていた。たしかに明治三十七年に余が始めて渡韓した頃は、朝鮮に勾玉を見なかつた。然るに、大正十年に慶州に大発掘があり、黄金の王冠以下、大量の古美術品が出土したが、その王冠は五十一箇の勾玉で飾られ、垂飾も巨大な勾玉で飾られていたのである。其の後、慶州のみならず朝鮮の各地で勾玉が出土するに及んで、今では却つて日本の勾玉は朝鮮からの渡来品とさえ見られるに到つた。其の他、鏡・土器・服飾にいたるまで、日韓文化交流の証跡は

顯著なものがある。

更に欽明天皇の御代以来、儒教を伴う支那文化、仏教を伴う支那及び印度文化が、悉々として我国に流入したが、それらの殆んど全部は朝鮮を経由して輸入されたのである。従つて日本の儒教仏教文化には、多かれ少かれ朝鮮化があり、朝鮮臭味の添加があるものと思わなければならない。こゝを以て朝鮮の文化資材は、日本文化を研究する上にとつて、必要欠くべからざる材料であると信ずる。

その意味で力の及ぶ限り考古学的文化資財を蒐集したのであつたが、図らずも此の度の変に遭い、忽慌として引揚げたために、その大部分を失つたことは、一己の利害を離れて日本文化研鑽の為に、真に遺憾に堪えない。幸に内地に置いた一小部分が戦災を免れ、自ら朝鮮古文化財群を成しているわけであるが、これだけのものでも今日新たに蒐集するとなると、絶対不可能といつても過言ではないと思う。

就いては、聊か蒐集品群の散佚を惜み、日本古代文化研究に寄与する微意と、余の全力を傾けて開拓経営した朝鮮に於る電気事業の追憶とを籠めて、小文化財団をつくつて之を法人となし、永久保存の道を講じたいと思うのである。この蒐集が基礎となり、更に有志の援助や公辺の保育を得て、完備と永続を庶幾することを得ば、会の本懐これに過ぎるものはないと云爾。

昭和三十一年六月

小倉コレクション保存会

設立代表者 小

課

武之助

庶